森の通信

宮崎県総合博物館だより

第 24 号

Museum and Cultural Institutions of Miyazaki Prefecture

発行日/平成8年1月29日

発行／宮崎県総合博物館　〒880 宮崎市神宮2丁目4番4号　TEL (0985) 24-2071

大きな成果をあげた

特別展

日本の消えゆく植物たち

はじめに

特別展「日本の消えゆく植物たち」は、県内外の多くの人に観賞していただきました。

全国の野生植物の現状が観覧できる充実した内容とするため、2年前から準備にあたり、企画、資料収集、展示にいたるまで、すべて手造りで実施しました。

開催期間中の入館者は一般（大人）を中心に堅調であったほか、小・中・高等学校が学習指導の一環として位置づけ、多くの児童・生徒が観賞しました。また、新聞やテレビなどのメディアを通じて情報発信が常時効果的に行われ、入館を促進するとともに、第2・第3の展覧会場としての機能を果たしてくれました。

県内外の有識者から、時機を得た全国にも誇りうる高い水準の展覧会との評価を得ると共に、野生植物や自然を大切にする心、広くは地球環境問題への意識の高揚が促進され大きな成果を上げることができました。

オープニングセレモニー

知事をはじめ多くの方々が参加して盛大に行われました。

開会式テープカット

開会式には、知事をはじめ、県議会議長、宮崎日日新聞社社長、県教育長、植物研究会会長、小・中・高等学校の教育研究会理科部会代表の方々の出席のもとに盛大に行われました。知事の祝辞では、「多くの野生植物が絶滅の危機に瀕していることに対する警鐘とともに、人と植物との共生のあり方や環境の大切さを考えさせてくれるよい機会になってほしい」と本展覧会への期待を述べられました。

また、教育長は「子供たちを進んで野山に誘い、自然の息吹を聞かせ、自然や野生植物を慈しむ豊かな心を育てる教育の推進と、この小さな展覧会が、自然と人との共生や地球環境という大きな課題に挑戦する一助になってほしい」と主催者を代表して挨拶をされました。

このあと展示場の解説を担当者が行い、サクラソウやオニバスのコーナーでは、幼少の頃の思い出と対比させられながら、盛んに質問がなげかけられました。

展示資料を熱心にご覧になる知事

八つのコーナーで展示紹介

展示は八つのコーナーに分け紹介しました。

(1) 「今、野山の植物が危ない」

日本には、約 5,300種もの野生植物があり、今、このうち６種に１種が絶滅の危機にある現状をレッドデータブック（我が国における保護上重要な植物種の現状）等を基に紹介しました。

(2) 「野生の植物からのメッセージ」

絶滅したり、絶滅に瀕している植物や、それらを絶滅に追いやる原因を重点調査７種（オキナグサ・サクラソウ・オニバス・サギソウ・フジバカマ・ミゾコウジュ・キスミレ）の生育地の現状を通して紹介しました。

「サクラソウ」

日本人に親しまれてきたサクラソウ・フジバカマをはじめ多くの野生植物が、日本から姿を消そうとしています。それが主に人の手によって引き起こされていることが問題なのです。

(3) 「あっ！なくなっている」

自生地からの紹介で、森林伐採・乱獲・道路や河川の改修工事やダム建設、採石・ウェットランドの開発・遷移進行・水質汚濁や農薬散布などが原因で消えていく植物を消えゆく現場とともに紹介しました。

絶滅した「ヒュウガシンケンダ」

宮崎県固有種「キバナノツキヌキホトトギス」

(4) 「消えゆく植物たち」

キバナノツキヌキホトトギス・ナガエミクリ・チョウジソウなど、宮崎県産の野生植物が絶滅に瀕している現状を紹介しました。

(5) 「役立つ野山の植物」

なぜ、保護が必要なのかを考えるコーナーで、私たちの周囲から１種の植物が消えた「たかがそれくらい」とすませてよいのかを訴えてみました。

野山の女王「ヒメユリ」

(6) 「野山の植物を守り育てる方法」

条約や法律等による保護の方策や、自治体や学校での取り組みを紹介しました。

埼玉県の三田ケ谷小学校は、絶滅寸前の「ムジナモ」の増殖を地域社会・家庭と学校が一体となり種の保存に取り組む活動を紹介し、宮崎県では大塚小学校の大淀川学習との関連を図った環境教育や宮崎西高等学校の野外調査の研究を紹介しました。

三田ヶ谷小学校

宮崎西高校

(7) 「そっとしておきたい大切な自然」

野生植物は自生地で保存することが大切です。したがって、絶滅のおそれのある植物が多く生育している所は保護が必要なのです。

都城の牛の腥にはかつてヒゴタイの自生地がありました。ヒゴタイは数万年前の氷河期に南下して居ついた大陸系植物です。そのヒゴタイが姿を消したことは、かつて霧島山麓が大陸に広がる大草原のような植生をもっていたことを語り伝える生き証人を失ったことになるのです。

宮崎県から姿を消したヒゴタイ

(8) 「自分にできることを考えよう」

千葉県成東湿原の保護に取り組んでいる地域住民による活動内容を紹介し、野生植物に対する県民一人一人の理解や保護活動への参加を促しました。

この他に、第２会場ではコンピュータによる情報検索とＡＶコーナーでは湿原の自然を紹介し、第３会場では北海道から沖縄県までの絶滅に瀕している野生植物を写真・標本の資料 300点で紹介しました。

コンピュータを操作する子供たち

教職員を対象にした特別見学会

臨場感ある展示を熱心に観覧された小・中・高等学校の先生方

県内全域の先生方を対象に特別見学会を実施しました。午後６時30分から８時30分までの夜間開館をして、県内各学校から53名の先生方が参加されました。臨場感あふれた展示と分かりやすい説明に感心され、熱心に勉強されました。

参加された綾小学校の鈴木健二先生は、「展示資料が豊富であり説明も大変わかりやすく、野生植物の現状がよく理解できた。今後、野生植物や自然について具体的な生きた学習指導をしたい。」とコメントされました。

熱心に聞き入り関心の高さを示した記念講演

植物学会の第一人者である、岩槻　邦男氏、矢原　徹一氏を講師とした特別記念講演会は、多くの聴衆を引きつけました。

岩槻先生は、人と自然の共生～絶滅危惧種に学ぶ～と題して、絶滅の危機にある野生植物の現状を通して、人が自然に及ぼしている影響や解決策等、人と自然の調和をいかにして図っていくかについて話されました。

矢原先生は、大絶滅の危機～日本の野生植物の現状と課題～と題して、植物種の多様性に恵まれた日本列島の中で失われていく野生植物の現状や滅びゆく種を救う道また、野生植物はなぜ大切なのかを話されました。

第2・3の展覧会場となったメディア

～ 報道機関の役割が効果的に機能して ～

今回の展覧会は、展示会場、講演会、メディアの３本柱が相乗的に機能し、野生植物や自然を大切にする心、広くは地球環境問題への意識の高揚が促進され大きな成果を上げることができました。

新聞をはじめ、テレビ、ラジオ等による報道が多くなされ、特に宮崎日日新聞の連載シリーズ「日本の消えゆく植物たち」（８回掲載）や窓の欄のカラー掲載の「若い目」また、社説など多岐にわたって掲載されました。

この報道機関による効果は大きく、入館を促進する役割と同時に、第２、第３の展示会場としての機能を果たしてくれました。

窓

レベルの高い植物展に驚嘆

無職　早上　三男　68

ようやく全国制覇をみた日本縦断高速道の加久藤トンネルを越えて「日本の消えゆく植物たち」と題する展覧会場を訪れた。

高速バスの広い車窓から見る外景、黄金の田園風景も素晴らしかったが、目指す会場内の展示物には心底驚いた。

まさしく時代のテーマ。そしてよくこれだけの資料を集めたなど、その内容の範囲、豊富さ、レベルの高さといい、一様の眼られた期間の出し物でなく国立の博物館でも訪れた感じで、主物者の熱意と努力がしのばれ、そのお労苦には頭が下がった。

しかし、これだけのものを展示する会場は、今時分なかなか都会では得難いことと思う半面、市街の中心を遠く離れ、うっそうと生い茂る宮崎神宮林のど真ん中とあって、よそ事ながら見学に訪れる家族のことが気にかかったものだ。

植物研究で老名な友人のさわやかな説明に聞き入って、記帳する暇もなく見て回っているうち、予定時間も瞬く間に過ぎ去って、当初計画の甘さが悔やまれてならなかった。

（熊本市）

消えゆく自然　残す道探ろう

会社員　佐々木吉弘　52

「日本の消えゆく植物たち」の展示会で見たヒメユリ、こんな美しい可憐（れ

社説

野生植物は自然のままで

豊かと思われている本県の自然も確実にやせ衰えている―宮崎市神宮二丁目の県総合植物園で開かれている特別展「日本の消えゆく植物たち」（十月十五日まで）の会場を回って、あらためて強く感じたことである。

多くの野生植物が開発を急激で自然にその姿を消している現状を写真や標本などを使って紹介、なお保護が必要なのかについて考えさせるユニークな会場になっている。これは多くの賛同した内容の展示は貴重なものであり、興味深い。

日本自然保護協会と世界自然保護基金日本委員会が一九八九年に作成した「我が国における保護上重要な植物種の現状」（レッドデータブック）によると、約三千二百種の日本の野生植物のうち約八百種、つまり六種に一種の絶滅が心配されている。

県内に自生する野生植物の場合も同じ悪条件にあるとされている。本県の種に絶滅の恐れがあり、既に姿を消してしまったものもある。

野生植物が失われる大きな原因は湿地や草原の開発、森林伐採、道路工事などの「開発行為」と観賞などによる「採集」といわれる。サクラソウ、サギソウ、オキナグサなど、各地に自生していたポピュラーな野生種も今や絶滅の危機にひんしている。

この植物展には連日たくさんの人が訪れ、自然保護に対する強い心の高ぶりを感じさせている。自然の生命力を守ろうという意識は、以前に比べると確実に高くなっている。しかし行政にはもっと保護面に積極的になってほしいし、さらに一般の人たちの意識が盛り上がっていかないと、自然が失われる食い止めることは難しい。

問題にならんで日本植物学会会長の岩槻邦男氏と九州大学教授の矢原徹一氏らのほう講演をし、野生植物の危機や自然との共生について熱っぽく訴えた。その岩槻氏が、講演の中でこう言っている。

「私たち誰の目からも、日本人は自分の周囲にある自然を愛し、植物とともに生きてきた。一つの絶滅危惧種ためにパンダに勝る一本の野草を求める心が、どこにもない高価な絶滅は必要としない。人の心を動かせる一本の野草は、山間部で咲くひかしみれ草なのである。その野草のうちに自分の心情を託せるとしたら、育てていきたいものである」。示唆に富んだ言葉である。

開発やマニアの採取は大きな問題だが、私たち自身も自然への愛しみに欠ける面はないか。例えばハイカーたちが野生植物を「一本ください」と採取したとする。同じ行為を多くの人がすれば、一瞬にして一種の植物はなくなってしまうのだ。

さまざまなことを考えさせられるこの特別展を開催に、さらに自然保護の心をはぐくんでいきたい。

若い目（特別編）

―消えゆく植物たち―

開発や乱獲の現状に衝撃

農業生　井野　勇樹　16

「日本の消えゆく植物たち」の展示に、私は驚きと新しい発見を受けました。

それは、知らないたくさんの野生植物が、無秩序な開発や乱獲によって滅びようとしている現状に、予想外の衝撃を覚えたからです。

宮崎では、ポピュラーだったサギソウの写真もサクラソウも絶滅の危機にひんしているそうです。

開発にともなって、開発アセスメントなどが実施されましたが、現状はあまり変わっていないようです。それは、私たち一人ひとりの意識が何も変わっていないということです。

自然の様に囲まれて、そ、私たちは安らぎを覚えます。

この展示会は、私たちに自然の大切さを教えてくれました。

生活環境の再考が必要

中学生　村川　神　14

私たちが住いろ、よく見かけている植物、今ではもう何に絶滅危惧とされることができないものがあることを、特別展を見学して、改めて考え直されました。

親しみもてるヒメユリの花

小学生　野宝　孝文　11

絶滅危惧植物の特別展を家族で見に行きました。

野生植物の中で、特に心に残ったのがヒメユリ。真っ赤です。五年所小学校の校章のもの花は、真っ赤鮮で、とても親しみがもてました。

キバナツキヌキホトトギスは、本県を代表する花と聞いて、自分のことのようにうれしくなりました。

また、絶滅危惧種のキボ学校のムジナそのものしまっは、同じ小学生がムジナを守る活動をしていることに、感心させられました。

野生植物のほとんどが、今までに見たことのないもので、ぼくたちに育てる感動を与えてくれる野生植物を、大切に守っていかなければいけない。（宮崎市）

野生植物や自然に対する意識の高揚

入館者に対してのアンケートを実施しました。小学生から一般を対象にしてのものでしたが、本特別展が与えた影響は大きく、野生植物や自然に対しての価値観の変容がうかがえました。

アンケートの結果　（アンケート回答者　６８３人）

□ 展覧会を何で知りましたか。

学校の勧め	１９８名
新聞	５８名
人の勧め	５３名
その他	２３名

□ この展覧会でよかったコーナーは

① 自生地からの報告	１４１名
② なぜ保護が必要か	１２８名
③ コンピュータ室	１０９名
④ 野生植物の日本の現状	８６名
⑤ その他	６６名

□ この展覧会を見ての印象や意見

○野生植物がなくなっている事実に驚いた。
○自然を守ること、大切さがよくわかった。
○野生植物に対して何が大切なのか、どのようにして保護しなければならないのかわかった。
○宮崎県（日本）の野生植物保護対策は遅れている。

□ 野生植物を保護するために

○静かに見るだけで採集をしない。
○自然を愛する心の育成を行う。
○一人一人の心掛けの徹底を行っていく。
○開発工事等の工夫をし環境保全に心掛けていく。

□ 今後の展覧会の希望

○野生動物関係　○宮崎の野鳥展
○宮崎の自然の紹介　○地質・鉱物展

□ 宮崎の自然イメージ【ベスト１０】

照葉樹林　空　太陽　海　緑　青島
日南海岸　大淀川　サボテン　ハマユウ

おわりに

本展覧会で紹介しました数々の植物たちが、人と共存して生き延びるためには、行政や研究者に任せるだけでなく、県民一人一人の野生植物に対する理解と協力が最も重要で効果のある方法です。野生植物が抱えているいろいろな問題を、この機会に考えていただいたことは今後大きな成果となって表れてくると信じています。

また、幼少時の自然体験が大変重要なことです。野生植物の保護については、「保護」を重視するあまり昆虫採集や押し花作りを子どもから奪い、自然とのふれあいをなくしてしまってはいけません。日本にはまだまだ素晴らしい自然が残っています。子どもたちは、野草を採り、虫たちを捕るなどの自然体験から生命の営みや生態系の仕組みも覚え、保護の重要性を身に付けていくものなのです。どんな法律や罰則よりも有効でもっともたやすい保護策は幼少時の自然体験にあります。

このことをふまえ、家庭・学校・地域社会は進んで子どもたちに自然体験を実践させる条件整備をしてほしいものです。また、大人たちによる乱獲が絶滅に瀕している大きな原因ともなっていますので、「採らない、売らない、買わない」に心がけることも大切です。

―― 本特別展は、その成果が高く評価され昨年末に県教育長表彰を受けました。――

１月から３月の催しもの

ミュージアムトーク「くじらを語る」
奈須敬二氏（西日本鯨研究会長）
２月10日（第２土曜日）
午前の部 11：00～11：45　午後の部 13：30～14：30

博物館こども教室
毎月第２・４土曜日には、午前11時から常設展の展示解説を実施しています。

埋文講座
１月27日（土）考古学から見た古代の水田と畑
２月24日（土）上鶴遺跡（新富町）の調査（コーナー展示解説）
３月23日（土）考古学から見た古代の食

森の名画座
３月９日（土）10：00～「脳障あしが魅動」（入場無料）

展覧会
２／１～２／４　勤労者美術展
２／10～２／18　教美展

休館のお知らせ

本館では、平成８年度から９年度にかけて、「感動と感性に満ちた、楽しく学ぶ博物館」づくりをめざして改装工事を実施しますので、休館の予定となっています。工事中ご迷惑をおかけしますが、ご協力をお願いいたします。

なお、県民文化ホールと埋蔵文化財センター及び民家園はオープンしております。

文責　児玉